



今橋 映子

今の大学生たちにとつて、留学という機会は気軽に手近なものなのだろうか? この所中国や韓国、台湾へ留学する人たちが増えているのを知ると、その点は十年以上前に留学した私の世代とは全く違ってきたなあ、と思う。あとはアメリカであれヨーロッパであれ、遠い留学先からでも、お正月や夏休みなどの折々、日本に一時帰国を普通に行っている、というのも変化した点だ。今やアメリカだったら国内航空運賃より安い場合もある位だから、もちろん可能なことだらうが、私が留学した頃は、まさか「故郷に錦を飾るまで」とは思わなかつても、「帰るまでは頑張る」というような、妙なテンションがまたあったように思う。

側面から興味を抱いてきた。特に明治期以降の欧米への「留学」を、歴史的に考察してみると、圧倒的に先進の文明に感服され、しかも歴史長い文明の先端に位置する眼前の光景を、「その奥底から理解する」といだろうか。実際に留学でなくとも、NGOの仕事やボランティアで次々と海外に飛び出すたくましい若者たちが、日本に沢山いることは、本心に心強い。けれども私がここで考えているのは、むしろ語学力や海外経験の少なさを臆している(かもしれない)人たちだ。

# 留学って何?

# 理解する心と フアイトもって

時代、最初の3カ月間は微熱が全く下がらず、留学の準備は語学や学問ではなく、体力だ、つくづく悟ったものだ。お蔭で病院や保健用語には妙に強くなり、フランスにも本格的な「漢方」療法があることを知ったりした。

ここで急に学問の話で恐縮だが、比較文学を研究する私は、パリでもその専門の大学院に留学したので、授業が始まった途端、私がここで方法的に学ぶことは殆んどないと悟って

の山と、そのシステムが中心とする都市論を研究する関係上、国立図書館とパリ歴史図書館に通い、パリの関係するそれこそ万巻の書類を前にして嬉しい反面、自分の学問がいかに「入口」でしかないかと思

館の中で、体調の悪さも滞在許可書を取るための呆れるほどの苦勞も思わす忘れて、夢中でカードを取っている自分に気付いた時、少しは向いているのかも思われない、と生まれて初めて思った瞬間だったかもしれ

とは不可能だと絶望して、祖国回帰した例はあまりに多い。いわば「深刻」に悩みすぎた例なのであるが、これは単に語学の問題だけではない、異文化接触の根源の問題を提起している。しかし一方で、今や自分の周りで、帰国子女や留学経験者が沢山いて、彼らの多くが海外での日々を軽々とこなして「国際人」しているのを見ると、自分も何かをしなければとあせっている人もいるのではな

しまった。といつても、これは私が必ずしも不遜であることを意味しない。比較文学の理論的精緻化がヨーロッパからアメリカに移ってしまつてすでに時を経ており、パリ大学の学問的改革は進んでいなかったのだ。むしろ大学では、フランス語で思考すること自体を「留学生」として学ぶことにこそ意義があったと思う。その代わり、呆然とするほど私が驚いたのは、図書館に「埋蔵」された資料

外経験の少なさを臆している(かもしれない)人たち。そんな方に、私が自分なりの経験から言えるのはただ一つ——みんな澄ました顔で海外から戻ってきているが、どの道、外国での生活もまた地道な日常生活の積み重ねで、失敗もすれば楽しい思い出もあり、違和感も沢山抱えて、それでも人間何とか生き抜いて来る——ということだ。かく言う私も大学院生のパリ留学

の解放——留学中の私はその一連をパリで見聞した。ルーミア大使館脇に偶然もその推移を自撃することになったのである。もちろんそれは、「歴史的事件の証言」なまこと華々しいものではない。むしろ近所文化研究科超域文化科学専攻助教

いまは・えいこ 総合文化研究科超域文化科学専攻助教  
61年東京都生まれ。92年総合文化研究科博士課程修了。パリ第四大学に留学後、筑波大学専任講師などを経て現職。主な著書に『異都憧憬 日本人のパリ』(柏書房、93年)『平凡社ライブラリー、01年』など。